

◎はなせ診療所そよ風だより N065

2016年2月 内科 吉澤泰介

○原の^{たがみますぞう}多上益蔵先生のこと。

戦前戦後を通じて^{はらち}原地（地元の方はハラと呼びます）に住まわれ、地域の方々の健康を守った多上益蔵という先生がおられました。明治30年前後の生まれで、今のお年寄りが子供の頃に、よく診てもらったそうです。当時は内科に外科、産婦人科もすべて一人でこなされていたそうで、後産の胎盤が出てこないの、腕を入れて取り出したなどという逸話も聞いています。

先生は府立医大を2番で卒業した秀才で、「先生に診て貰っているのなら間違いはない」と他の医師も太鼓判を押すほどだったそうです。難病に遭うと夜を徹して医学書を読み込まれていたそうです。

今では交通の便が良くなりましたが、当時は雪深い細道が多く、往診に大変な苦勞をされていた事でしょう。当時ではまだ珍しかった自転車に乗って花脊峠への道を登り、別所から鯖街道を越えて琵琶湖まで出かけていたと聞きました。往復5時間では済まなかったでしょう。

先生は釣り好きな方だったそうで、地域活性化のためにと、自腹を切ってアユ釣りを始められたそうです。仕事で忙しくされていた先生のために、自宅前を流れる川は先生専用の釣り場になっていたそうです。

また、村の人たちが先生のお嫁さんのお迎えに、鞍馬までかごを担いで行ったという微笑ましいエピソードも聞きました。先生の家は今も原にあり、当時のかごが吊ってあるそうです。

多上益蔵先生は、^{やます}廃校となった山柘小学校で文化勲章を授与されました。先生の

足元にも及びませんが、私も自分の能力をフルに発揮し、地域の健康維持増進のために末永く頑張りたいと思います。